

朔 風 動 秋 草

——松村謙三顕彰会 第12次訪中団に同行して——

富山県農村医学研究会会長 豊 田 文 一

目 次

- | | |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. はじめに 2. 西苑飯店ホテル 3. 煙突のない工場 4. 首をもがれた石仏 5. 人口問題に悩む中国 6. ああ太原 7. 洞窟住居 8. 竹葉青酒 9. 108 段 | <ol style="list-style-type: none"> 10. 街や村から拾う <ul style="list-style-type: none"> イ. 穀 竿 (カラザオ) ロ. 道路の遮断機 ハ. 中国のイスラム教 ニ. 耕して天に登る ホ. 五台山回廊 ヘ. 煙草の吸いがら ト. 庶民住宅 11. 曲水の宴 |
|---|---|

1. はじめに

昨年5月、高岡市と遼寧省錦州市との友好都市締結調印式に、名誉市民として参列するため中国に渡航し、この度は松村謙三顕彰会第12次訪中団に同行、北京—大同—五台山—太原を廻り、10日間の日程をつつがなく帰国した。

私は、昭和12年9月より15年1月まで河北省、山西省の戦野にあり、とくに山西省にはその大半駐留し、懐旧の念もだし難く、訪中団に参加させていただいた。

10月10日北京着、11日中日友好協会を表敬訪問し、孫平化会長と懇談の機会を得た。



第1図 松村謙三先生筆
(20数年前、農協高岡病院長時代)
私に贈与されたもの



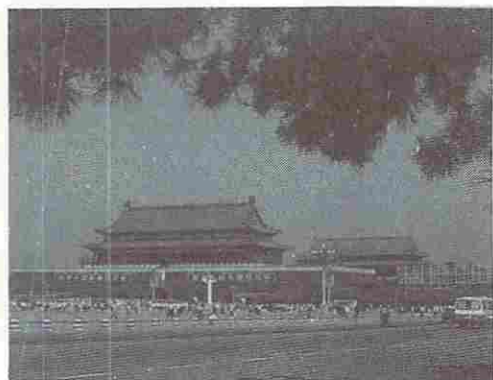
第2図 塔乗した中国民航機



第3図 玄関にて見送りの孫平化会長

とくに同会長は流暢な日本語で私どもに接しられ、和気藹々として松村謙三先生の日中国交回復に尽された情熱について述べられ、今後の友好のさらに深まることを希望された。私は孫会長の余りにも日本語の流暢なのに驚き尋ねると、日本に留学し早稲田大学の出身、奇しくも松村先生も早大出身、この同窓であったことも国交回復に強い絆となったものと私には感じられた。表敬訪問後、北京市内の視察となり、昨年は主な所を瞥見したに過ぎなかったが、今回はスケジュールを密に組まれ、歴史的文化的の遺産を余す所なく廻遊した。

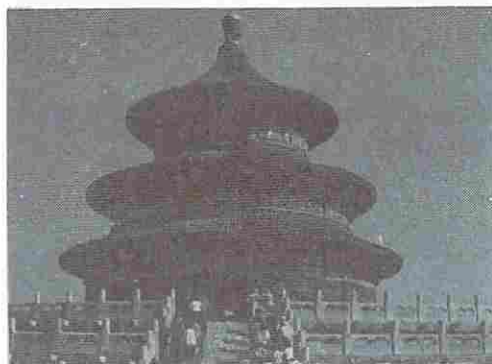
北京は古くは薊（ケイ）と呼ばれた原始的部落であったが、同代に燕京（エンキョウ）、



第4図 天安門広場

北方民族の契丹、元の侵攻後、大都と称し政治の中心となった。1368年元が滅び、漢民族の国家である明朝が起って、今の南京を国都とした。1420年成祖永楽帝は、元の大都を国都と定め、北京と称した。北京の名称はこのときから始まる。1644年以降、明を滅した満州族の清朝が滅びるまで、ここを国都としている。ついで中華民国成立後同じく国都としていたが、北伐完成後、南京に移り、この地を北京と称した。1949年中華人民共和国が成立すると再び国都となり、政治の中枢となっている。顧りみれば、過去1000年にわたり、この地を中心として全中国を支配したともいえる。

ただわれわれ日本人はペキンと呼んでいるが、外国人向けの書類にはBeijing ペイジンと記載し、このことについて当地の人に質さなかったので判らないが“ペイジン”といっているのかも知れない。



第5図 天壇の祈年殿

2. 西苑飯店ホテル

北京では最も豪華なホテルの一つで、地上20階、その上に展望台の2階のホールがある。部屋も東京あたりの一流ホテルと遜色がない。しかし朝食は滞在の2日間、5～6分歩いて裏側にある外部の古い建物まで行かねばならないので閉口した。

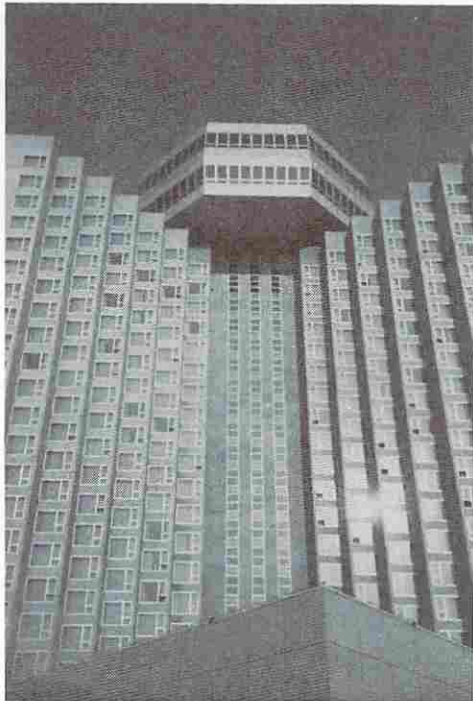
しかも粥食、これは中国の習慣かも知れないが、私は子供の頃から粥食は好まず、食欲がすずまなかった。しかし同行の人達は、持

参した梅干や福神漬でおいしそうにそそって
いる。他のテーブルにいる外国人（私も外国
人だが）パン食をうまそうに食べているが、
私だけパンを持ってこいともいえない。私は
これを横目で眺めながら、出されたマントウ
を頬張り、副食の肉料理をお菜にして腹を満
した。

しかし昼食、夕食は、豪華な中国料理、と
くに北京ダックは一年振りで、流石本場の逸
品である。



第6図 ペキンダックの調理場



第7図 西苑飯店ホテル

さて北京は年間100万人の外国人観光客、
それに毎日80万~100万人が出入していると
いわれる。ホテル数は東京の1/2、とうてい取
容し切れず、今はホテルの建設ラッシュ、方
々に空高くクレーンが林立している。このう
ちには10階を越すアパート群の建設もあろう
が、眼をみはるものもある。しかもホテルに
ついては、日本、アメリカ、香港、シンガポ
ールなどとの合弁が多い。恐らく海外の華僑
との出資と思われる。

しかしこれらのホテルはすべて国営で、従
業員は勿論公務員、あとでも触れるが、西苑
飯店では感じなかったが、大同、五台山、太
原のホテルのサービスは、私の経験した諸外
国に比べて最低である。



第8図 テーブルに運こばれたペキンダック



第9図 十数階もある労働者のアパート群

4. 煙突のない工場

中国を旅行したある知人から「今の中国は煙突のない工場で財政を支えている」と私に話した。都市郊外は煙突の林立で、豊富な石炭をエネルギーとしてもうもうたる黒煙をなびかせている。しかし科学の近代化の遅れているこの国では製品の輸出はままならない。私はこの知人にその意味を質すと観光産業という。

私は北京到着の翌日、昨年にひき続いて八達嶺の万里の長城に赴いた。1年前はバスの行列に悩まされながらどおりついたが、70キロ余の道路の90位は3車線の舗装道路で快適に飛ばせる。今残余は工事中で1年位で長城まで完成されそうな気がした。さてその関門である居庸関の表側、裏側の広場には露店がひしめいていたが、今は全部取り払われてバスの駐車場になり、露店の姿は消えている。長城の甬道（通路）は砂糖に群がる蟻の如く人の波である。

また山西省の仏蹟、標高2,000米の台懷鎮、ここは五台山の盆地にあり、数十の寺院は1000年以上も経た文化的考古学的の所産を保持している。私は50年前、兵役にあり、ゲリラ掃討にこの地に赴いたとき岩石の多い河床道、棧道、峠路を越し、人馬の通過に難渋したが、今は大同より150キロ、この地まで大型バスで快適に到達しうる。アスファルト舗装ではないが、中国独特の粘土、砂利、土、砂で固められ、アスファルト舗装に匹敵する。何分にも失業率ゼロと聞かされたこの国では人海戦術でこの道路を完成したものであろう。全く立山の観光道路に劣らないものであった。

この観光に関連するホテル、レストラン、土産物店は、小さな露店商を別にしてすべて国营、また不思議なことに寺院も国のもので僧は公務員、建物の修理や僧の俸給は、国より支払われ、日本のように門徒によって支えられているとの全く趣がちがう。

その代りといおうが、ホテルなどのサービ



第10図 万里の長城の雑踏

スは世界最低、例えば大同のホテルで、エレベーターが途中で止り、約20分間私を含めて数名缶詰めとなり、生れて初めての経験で、酸欠にならないかと生きた心地もなかった。北京のホテルは日立製でスムーズだったが、大同、太原は上海、天津製で遅いことこの上なし。結局ドアをたたいて外部と連絡がとれ開放された。

また大同や五台山のホテルでは午後8時後は水道が止ってしまう。もちろんバスの湯も出ない。零下4度の五台山のホテルでは暖房もされない。ふるえ上りながら文句をいうと係員は8時間労働で帰ってしまっていて判らないという。日本のように気温によって暖房を操作するのではなく、恐らく11月からという規則があるらしい。朝も水道は午前8時に水道局で開栓して給水するようである。

比喩として「煙突のない工場」、すなわち観光事業に対して中国政府は、最大の努力を払っているような気がし、北京など観光地では超高層のホテル、またレストランなどが陸続として建築中である。北京では外国人客は年間100万人、主として日本人、アメリカ人、太原では1万人、主として日本人、フランス人だそうである。この他にこの国の人々の観光客はさらに多数を占めるだろう。

とにかく今度感じたことは、ホテルの建物はいいがサービスの悪いことで、世界を回って見て経験したことはない。また中国北部地

方の旅行は、日本人にとって5月～9月までは最適であると私には感じとれた。



第11図 山腹を削りとった五台山への観光道路

4. 首をもがれた石仏

私どもは北京より夜行管快列車(急行寝台)で大同に向った。大同の目玉は何といっても雲崗の石窟である。市の西方17キロに武周山という含炭ジュラ紀の砂岩層の丘で比高約100米、垂直にそそり立つ岩層に大小43の石窟がうがたれている。この石窟は460年北魏の文世帝時代に彫り始められ、主なるものは53洞、1500年の風雪にたえ私どもの眼の前にさらされている。そのなかに釈迦、弥勒など高さ10米に及ぶ仏像があるいは立ち、あるいは安座し、仏龕といわれる天井や側壁に大小さまざまな仏像が刻まれている。それらは約5万體といわれている。

仏像鑑賞には素人の私には時代考証もままならず、柔和な仏の顔を拝するだけで、豪華多彩なよそおい、なかには私どもに笑いさえもらしているように思われた。

ただこの仏像のなかには、首がもがれ、また身体の法衣に銃痕らしき穴の無数にみられるものもあり、なかには眼球がえぐりぬかれているものもある。

私はこの仏像の損傷が余りにも痛々しいので、中国人の通訳にそのわけを問い質してみた。その答は「以前から外国人の考古学者などが周壁や天井の小さな仏像を研究のため掘り起して持ち去ったものものもあるが、この

著しい損傷は文化大革命のとき紅衛兵などによって破壊されたものが最も多い」という。文化大革命はマルクス主義、とくに共産主義革命に伴う文化上の変革であって、過去の文化を全面的に否定するのではなく、それを批判し、新しい文化を創造する、とくに文化を少数のものの中から真に大衆的のものにするという理念のもとに、この大同の石窟も一部の僧や篤信家の保護に反発し、一般大衆の文化遺産たらしめようとして、中国全土にはうはいとして起った文化大革命の嵐にまきこまれ、この石窟、また仏像の破壊に連らなつたものとして考えざるをえない。

この仏像のまとう衣装は、インドのガンダーラ、マトウラー様式、また中央アジアの様式の影響が強くあらわれているといわれる。この石窟、仏像は当時の皇帝の権力と財力によって約100年間に彫り上げられ、1500年の風雪に耐えながら今日に至っている。これを政治体制の変革を機として破壊に導くとは日本人の感覚ではどうしても考えにくい。

実は日中戦争の初期、日本軍は大同を占拠した。そのとき軍は下記のような布告を出している。

告

雲崗石仏寺ハ世界的ノ名跡ニシテ軍ハ
之カ愛護保有ニ勉ム 若シ破毀、掠奪
等ヲナスモノアラハ 日本軍ト雖モ軍
法ニ照ラシテ嚴重ニ処断ス

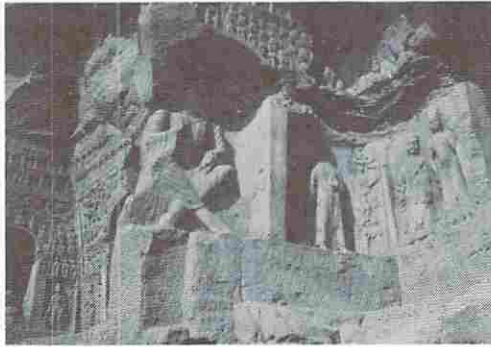
昭和十二年九月二十日

激しい戦闘でも、日本軍は上記のような布告を出した。文化財保護に当たっていたことを知ると同時にこのことはわれわれ日本人の感覚でなからうか。

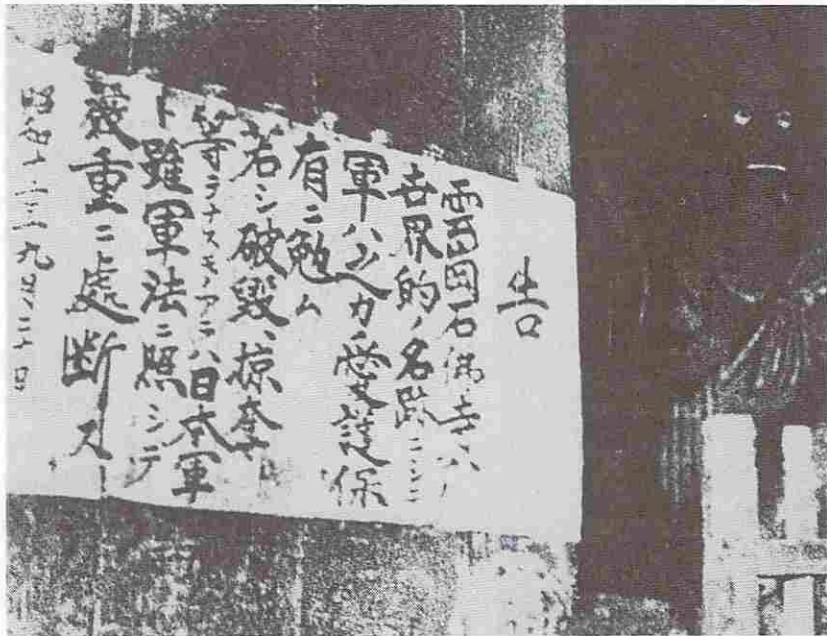
さらにその後、私どもは五台山の聖地に赴き、数多くの寺院を歴訪した。そのなかにも仏像の首がとられ、眼玉がくりぬかれ、手足がたたきこわされているものを時々みうけた。

これも文化大革命の所産だと聞かされ、寺院の一部も破壊されたが、今は国の手で修復中の所が処々に眼についた。

大同を去るに当り、この雲崗の石窟が、再びこのような悲惨な状態にならないよう祈りながら五台山へ向った。



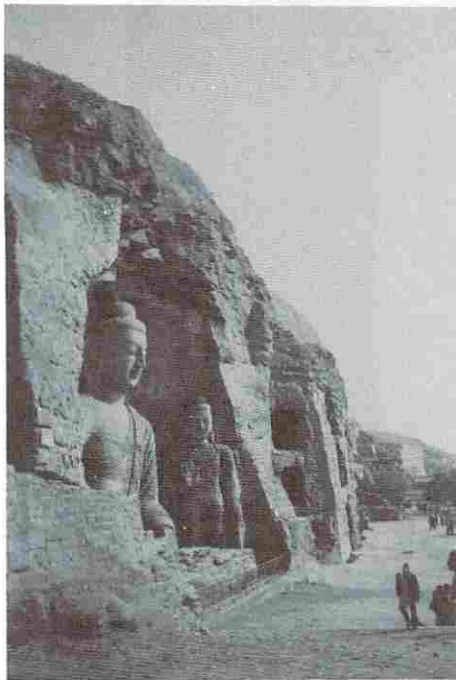
第12図 首をもがれた石仏



第 13 図



第14図 石仏が全く破壊され、台座のみ残る石窟



第15図 大同・雲崗石仏

5. 人口問題に悩む中国

中国の人口抑制について、この国の憲法では、「夫婦は双方ともに計画出産の義務を負う」と規定、婚姻法に「男子は満22才、女子は満20才から」となっていたが、最近では男子25才、女子23才と改正され、晩婚晩育が奨励されているとある中国人から聞かされた。平均寿命は、男62.10才、女65.90才と国際統計でみられるが、広大な地域での国勢調査もままならないし、統計学的解析能力にも乏しく疑わしい点もある。

現在中国の悩みは10億というほう大な人口を擁し、このまま推移すれば、今世紀末までに12億5千万と推定される。そのための人口抑制政策である。かつ計画出産は1夫1婦1児を至上命令とし、避妊知識や晩婚晩育の教育をなし、妊娠中絶やピルなどの避妊薬の服用、男性も避妊具や精系結紮を行うことが多い。もちろんこれらの手術、薬剤は全部無料。

この人口抑制を行っているのは食糧問題に帰する。中国の人口は、世界人口の22%、国土はソ連、カナダに次ぐ大国で、世界陸地の1/3を占め、人口増加率は年間1.4%（日本0.9%）、この増加防止に躍起となっている。

中国では、揚子江、黄河などの下流地域では豊かな耕地がひろがっているが、全土からみると僅かに10.2%、（日本11.5%）、牧草地29.9%（日本1.5%）、その他は食糧生産に関係のない荒蕪地、森林、果樹園などである。

中国は工業の近代化が遅れており、全人口の57.4%は農業人口で農業国といえる。しかもこれでも全人口を養うだけの農業生産の将来は極めて暗い。

それで地域差もあるが、都市の例をとると晩婚の夫婦は、規定の結婚休暇3日に加えて7日間の有給休暇を加える。結婚して24才過ぎて子供を生んだ場合、規定の産休に生涯子供を1人しかつくらぬと夫婦がきめて「1子証明」をした場合、更に1ヶ月の産休が増える（有給）。この「1子証明」を下附される

と年1度養育補助費として40～60元支給される。

また同行した中国人の通訳の話では、2人目からの出生児は戸籍に登録しない。そればかりでなく2人以上の出生児には物資や食糧の配給はしない。ただ2人目からの出生児を子供のいない家庭に養子にやると、養家先の戸籍に登録する。

この人口増加に悩むのは1億5千万の人口をもつインドネシアも1夫婦2児までと随所にポスターを貼ってあるのを見たり、淡路島ほどのシンガポールは人口250万、食糧生産基地はなく、人口抑制が必至となり、3人以上の子供をもつと税金が累加される。

以上人口増加に悩む中国の現状を見たまま、聞いたまま書きしるしたが、1夫婦1児という方針は、将来高令者の激増する時代がくると予想される。そのことを考慮しているのか疑問をもつ。労働者の一般職の定年は男60才、女55才、定年後は退職時の賃金を年金として支払われる。退職後の生活には心配ないように思われる。これも年金の増高に対して国の財政負担をどのようにしてゆくか、共産主義国家の社会保障制度のからくりは、私には判らない。

なお結婚について触れるが、恋愛は全く自由である。ここでは日本のような仲人がなく両親や友人が、それぞれの相手を紹介し、男女合意ができれば結婚する。しかし工場労働者などの多くは、そのような余裕はなく、国営の婚姻紹介所に登録する。ここへ履歴書と希望条件を申し入れる。紹介所では、各種条件を勧告して男女両方を引き合せ、交際させる。交際によって合意ができれば、婚姻ということになる。

6. ああ太原(タイユアン)

北京ではなお残されていたものの山西省へ入ってから漸く城門をみる事ができたのは忻県である。掲額の「晋北鎖鑰」(シンボク

サヤク、晋は山西省の古い名称、鎖鑰は門戸のしまり、出入の要処の意)は50年前いつも見なれていたものである。

太原から大同附近まで、私どもの守備範囲で、バスで通った五台山からの豆村鎮、五台県、定襄県なども、見わたすと過去の記憶が点々と蘇がえる。私どもの駐屯していた部落は樊家野場といい、そのあたりは今や工場地帯となり、丁度昼食をとったレストラン附近のように思われる。城門は幾百年の風雪に耐え、心のうちにあった幻想から現実にも引きもどされる。城壁はすべてとり除かれ、道路におきかえられていた。ただ城内の通りをかいま見たが、かつてのただずまいを残している。

忻県から太原へは、大同一太原の公路として地方経済に裨益しているだろうが、かつての馱馬や徒歩のみ通ずる村落を結ぶ屈曲の多い道は、どこにあったか見当もつかない。

その公路を疾走しながら太原に入る。太原は14キロといわれる城壁にかこまれ、北には北門、南には首義門があったが、整備された公路に導かれ、いつのまにか近代都市化された市街地にそのまま入りこみ、城門や城壁の痕跡すら見出せない。

私どもの部隊は、首義門南に接する城外の晋綏軍官学校に駐留しており、暇なときには街への買物や散歩に、この門を常に出入していた。泊ったホテルの前の公園は、新民公園と呼ばれており、よくここに憩の場を求めた。

私は何年前に城門や城壁がなくなったか、ホテルの人に質してみた。これは解放戦争後のことである。解放戦争とは、蔣介石の国民党軍と毛沢東の共産軍の戦闘で、日本の敗戦後の主導権争奪の争いである。この戦争後、毛沢東の指示により、戦略上の必要からすべての城門や城壁が撤去され、残存している所は、ほとんどないということである。

私どもの宿泊したホテル近くの大通り、解放通りは取り除かれた城壁の跡であの広い道路と化している。



第16圖 忻県北門（昭和13年）



第18圖 忻県城壁（昭和13年）



第17圖 忻県北門（昭和61年10月）

さて昭和12年11月、私どもの山砲兵連隊は太原に入った。そのときの模様と感想を私の恩師である当時の金沢医科大学（現金沢大医学部）の松田龍一先生への便りを、先般先生のご遺族から返されたのでここに記してみることにする。

「12月9日（昭和12年）内地からの郵便が始めてつきまして、懐かしい便をえて、各兵舎のあちらこちらで歓声が挙っています。私の学位論文通過で部隊長始め戦友、部下から沢山の祝辞をいただき、感激の涙が出ました。11月1日河北省南部から太行山脈の山陵めがけて山砲の威力をあらわし河床道、棧道、山頂の越えましたが、馬も漸くの道でして、村落も少なく、溪谷や河底に露営の夢を結びました。万里の長城は九龍関で越え山西省に入りました。夕陽は豪壮な山容に映えて、内地ではこれだけの景観はみられないでしょう。

煙雲万波河北野、越関衆望山西嶺

天下險峻在脚下、將兵意氣將冲天

これは偶感ですが、中原の鹿を追いつつ、河北山西の境界に駒を進めたときは感慨無量でした。私の部隊は1300名ばかりありましたが、天津より作戦を起し、すでに800キロ、その間戦死者は数名に過ぎません。河北省の趙州州附近の戦場で戦友の1人が戦死しまして、我ども戦友は野の花を供さげ、支那紙で千代鶴を作りこれを花輪にしてかざり、読経も戦友、お供えのお菓子は畑から芋をとり、これに砂糖（微発したもの）をまぶしたものをならべ、一本の杭をけずり、墓標として埋葬しました。

鉛筆で書ける墓標や 秋の風

私の愚作ですが、冥福を祈りました。

太原城は、流石豪勢なものでした。その城門は首義門といいまして城内の南の玄関です。山西軍は南方遠く徹退し戦闘もなく占領しました。なかは荒れてもいますが、昨今住民もぼつぼつ帰り、民衆も子供の手をひき、老人を一輪車のにせ列も切らず城内へ帰還してい

ます。治安も回復し商人もボツボツ開店しそうです。同時に後方から娘子軍も進撃してきまして、私ども衛生部員の苦勞の種がふえました。

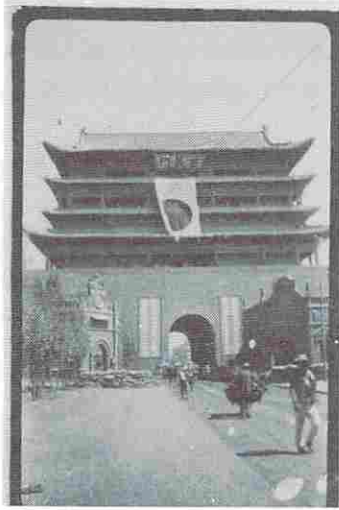
数日前、部隊全員を集め、講堂で花柳病の害毒についての衛生講話を一席やりまして、「もし帰還のときがあっても、これにかかった場合、全治するまで一人も帰さないぞ」ときめつけておきました。

山西省へ入って感じましたことは、住民の裕福なこと。鉄と石炭に恵まれ、河北省とは比べものにはなりません。山西モンロー主義を唱えた省主席閻錫山の政治にあったようです。しかし共産軍に操つられ、排日排貨を続けていました。それでも日本品が相当入っていたようで、押収した支那軍医極（薬品箱）には武田薬品、塩野義、三共の薬品がかなり入っていました。

私が太原へ参りましてから毎日快晴です。雨、雪は一度もありません。気温は朝に零下10数度のこともあります。兵舎内の暖房は石炭が豊富で、ストーブで十分暖がとれます。

これから内地との音信が自由にきくようになりますので、後便に托します。

以上、太原の市街へ入り、50年の有為転変をまざまざと私の心の底を襲い冗長に流れたが、「ああ 太原」と過去の記憶を喚び起し、一文を草した次第である。



第19図 太原首義門（昭和12年）



第20図 太原双塔寺（昭和12年）



第21図 太原市街（昭和12年）

7. 洞窟住居

山西省は大部分標高1000米の高原状の山地で、みわたせば重畳と重なり合っており、段丘状を示す所が多い。しかも黄土が厚く表面をおおっている片麻岩、古生層の岩石からなっている。この段丘状の断端を利用して掘り進み穴居を作り住居となす。

私は50年前、作戦に従ってこの山間地帯に赴いたとき、時々この洞窟住居で仮寝の夢を結ぶこともあった。此度の旅行で懐旧の念にかられ、再びこれに接したい念願をいだいていた。しかし仏蹟の巡拝が続き、ほとんどその余裕がなく、僅かに一ヶ所のみ近くより望むことができた。



第22図 洞窟住居

この洞窟住居は垂直に立った段丘の下をえぐりとったようなもので、間口は20米位、高さ5米位、入口は2ヶ所で、一方は居間、片方は貯蔵庫のように思われた。居間と考えられる方は、前面に扉があり、その横は窓でガラス板がはめこまれている。この家の主人かも知れないが、粟や小麦の粉をムシロの上にひろげ乾燥し、窓ぎわでトーマロコシを並べて乾していた。その家のなかに入りこむ余裕がなかったが、かつての経験から、部屋の方は調度品や炊事用具もあるだろう。また炕(カウ)、私どもはカンといていたが、いわゆる「オンドル」で床の下に火気を通じ、床とともに室内を暖める、寒冷期に燃料として高粱や黍の殻、あるいは石炭を使う。

山西省北部では、極寒には零下30度位を経験したが、雪は降るものの、ほとんど積らない。

夏期は、暑熱をその上の岩盤でさえぎり、快適であった。

中国では、この洞窟住居は山西北部地区に限られているようで、集落を形成している所も多い。

この洞窟住居は旧石器時代初期よりあったらしく、その頃は天然の穴居で、寒気を避けるというよりも、猛獣の来襲から自らを守るため便利であったともいえる。しかし新石器時代以後掘削道具の発達、結集労力の増大などによって、相当大きな洞窟が容易に作れるようになった。私は山西省北部でバスの窓から時々この集落を望見した。

私は、今度のツアーで、この洞窟住居を再び接したいと心のなかに持ちつづけていた。幸に間近かにこれを眺め懐旧の念新たなものがあつた。

8. 竹葉青酒

(杏花村汾酒行 出品)

私は生来酒になじめない。体質的なものかも知れない。ところが太原で中国国際旅行社太原分社長の歓迎レセプションがあり、私どもにも竹葉青酒という酒が一本づつ贈られた。この酒は、汾酒のうちでも銘柄品である。

この汾酒の醸造工場見学も日程に組まれ、約170キロの汾陽に向いバスを走らせた。途中70キロばかりの所の交城県石壁山中の玄中寺に参拝することになる。

ここは曇鸞大師(ドンラン)(476~542)が魏の孝静帝の帰依をえて、洛陽にて観無量寿経を読んで開眼し、浄土宗にその心をゆだね、教学と実践を確立したと伝えられる。この玄中寺は、石壁山、その名の如く岷々たる岩壁のそそり立つ台地に、1500年の風雪に耐え、その伽藍が連らなっている。親鸞は、その教学を引き継いだ道綽、善導に傾斜し、高僧和

讃で称えている。

常盤大定（東大教授、真宗大谷派の学僧）は5回にわたり中国に渡航し、この玄中寺の存在を発見したといわれている。ここは浄土宗の寺院で、親鸞を祖とする真宗の源流ともいえ、真宗王国であるわが越中人には、とくに因縁浅からざる絆で結ばれる。また大谷瑩潤師が、昭和28年中国人捕虜殉難者慰霊実行委員会任職委員長となり、中国人の遺骨をここに送り返し、また30年に中国紅十字社李徳全女史に玄中寺復興を懇願し、以後国家の事業として修復が続けられている。

参拝後、玄中寺を跡にして向ったのは汾陽県杏花村である。ここは紹興酒とともに中国で有名な汾酒の主産地である。公路を走ること70キロ。

杜牧の詩

清明時節雨紛々 路上行人欲斷魂
借問酒家何処有 牧童遙指杏花村

1000年前の杜牧の感傷をうたったものであるが、舗装された広い公路を疾走するバスのなかでは、何の感慨も起らない。広々と畑のひろがる農村を旅し、汾陽の街を指呼の間に望む杏下村辺で、しばしの憩を求めんとする杜牧の心情をうつしているようである。

ただ私どもは、この汾酒工場の見学、また中国の二大銘酒を土産としてせんと的心づもりも気がせくばかりである。漸くにして杏花村の掲額のある門を通りぬけ工場に到着する。午後1時もとうに過ぎ、空腹に喘ぎつつ先ず昼食。この工場は勿論国営で、広大な敷地に幾棟もの醸造工場がある。飲物は蔵出しともいえる汾酒で先ず乾杯。酒客の多いグループのことグイグイあける人も多い。

いつの間にか時間が経過し、ここまで来て、とうとう工場見学は割愛という始末になった。

さて、この汾酒は日本へも輸入されているが、原料は高粱、そのアルコール分は50～60度、世界の酒類のなかで最高のアルコール含有の種類の一つである。そもそも日本では清酒を



第23図 玄中寺にて、山下団長の読経

評価するのに“五味”ということがある。すなわち甘、酸、辛、苦、渋で、これがよく調和したとき、いわゆる“こく”が生れてくる。さてこの汾酒に“こく”があるかどうか、私には判らない。ただ口に入れるとき快よい甘みと香が私には感ぜられる。またアルコールの軽い溶液が、口腔内から咽喉まで拡散する。しかし酩酊を恐れてパーティでも小さなグラスに2～3杯にとどめておいた。

さて話は50年前にさかのぼる。作戦中農家に入ると大きなカメに自家製であろうが、高粱酒が貯えていた。酒に飢えている兵隊は柄



第24図 汾酒工場へ入る。

杓でがぶのみしたものもあり、ついに腰を抜かして歩けなくなるものもあり、ほおっておくわけにも行かず、馬の横っ腹に縄でくりつけて帰営した思い出もある。

私は冒頭に触れたように太原で贈られた汾酒の最高級といわれる竹葉青酒を一本だけ持ち帰り、毎晩盃に一パイだけ呑んでいるが、酒をたしまない私でもやはりおいしい。

9. 108 段

除夜の鐘は108といい、108の煩惱にちなんで、それを一つづつ救うため108点の鐘をつき鳴らすという。通例として107点は旧年に、残りの一点は新年につくならわして、これを旧年を送る宣命（センメイ、みことのり）、新年を迎える最初の一点は警茶（ケイサク、はげます）という。

さて五台山の寺院は、山腹に建立され、数多くの階段を登らねばならない。この階段は石造で108段のことが多い。これを登りきりその門に達しても、いらかを並らべる堂宇は上にも重なり合って建立されている。従って一つの寺院に到達してもまた石段を踏まなければならない。この108の石段、われわれには、こんな多くの煩惱がある筈がないのに登る。朝来零下の寒さでも汗がにじむ。

煩惱は仏教用語で、貪慾（ドンヨク）、嗔恚（シンイ：いかりうらむ）、愚痴（グチ）、慢、疑、見（善悪に対する誤った見解）、さら

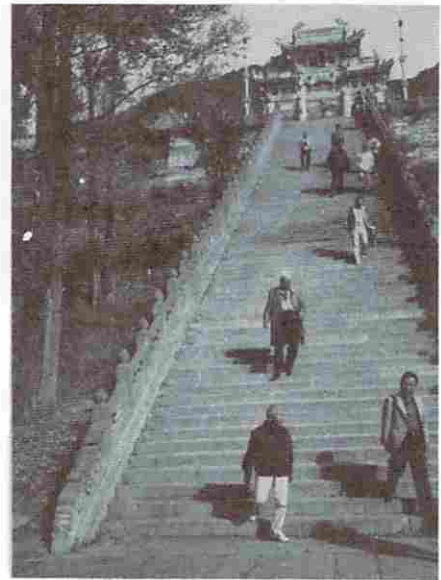


第25図 南山寺の石段

に放逸、懈怠（ケタイ：なまける）、不信、慳（ケシ：ものおしみ）、嫉（シツ、そねみ）など、その他数えると108となる。もの本をいくつも調らべたが、その他は見出せなかった。

さてこの108段の石段を踏みしめながら、堂宇に近づくだけで、有難い仏教語を浮かべた人があるだろうか。しかし途中でダウンしたものは一人もなかった。

私は同行中の最年長、皆さんから足が強いとお褒めの言葉を何度もいただいた。しかしこれには一つのコツがある。ジグザグに登るに限る。私は若い頃から登山が趣味で、急坂にかかるとこの歩き方をやる。同じ階段を2、3歩づつ踏む、歩数が多くなるが疲れしない。敢てこの歩行法を提言する。ただし後の祭かも知れないが。



第26図 108段の階段、降りるとき元気がいい

10. 街や村から拾う

イ. 穀 竿（からざお）

大同から五台山に向う途中、豆村鎮の部落で小休止。農家の前の広場で高粱、粟などの作業をしていた。その農具は、幼い頃のかすかに残る記憶が蘇る。それは穀竿という農具

で、穀物の脱穀作業を行っているのである。これは穀物（粟、ヒエ、コーリヤン、豆類など）の脱穀や麦打ちに使う器具で、竿の先にさらに短い竿、枢（クルル：からくり）をつけ、これによって自由に回転できるようになる。汗をたらして打っている風景をみた。中国農村の一つの風物詩ともいえる。何分にも過剰の人口をかかえ動力による脱穀機など思いもよらず、可能な限り人力を使っているようである。最近インドネシヤへ技術開発調査に渡航し、農村を視察したとき、ここの農民の耕作をみて「君らは、日本の農業のように機械を使えば、農作業の能率もあがるが」と問いかけると「そんなことをすれば、人が余って食っていけない」という答を聞いたことを思い出す。



第27図 穀 竿（カラザオ）、豆村鎮にて

かって毛沢東が「農は大塞に学べ」、このキャッチフレーズは当時の農業に対する代表的理念である。私は昭和12年、この地を通り太原へ進攻した。岩肌をむき出した峨々たる山系と谷間の連続で、その猫額の地に幾十万の人民を動員して耕地を作り、果して経済的価値があるかどうか、テレビの放映を見て疑いの眼をみはった。この山間僻地、閉された社会で、革命後全く共産思想に洗脳され、中央政府の上意下達に盲信的な人民大衆でなければ到底不能であつたらう。この行きずりにみた穀竿の風景もこれに相通ずる気がしてならなかった。



第28図 牛にて畑を耕す

それからもう一つ。私どもの通る舗装された道路上一バイ高粱、粟、稗が刈りとったまま並らべられている。その上をバスやトラックなどが疾走してゆく。その重量と車輪の回転で、実った穀物の粒がはじき飛ばされる。もちろん茎もつぶされ、硬さがとれる。通ったあと農民が早速飛び出してきて、箒でかき集つめる。こんな風景をみたのは始めてで、なかなかいいアイデアで、生活の知恵ともいえる。私の友人も山東省でこれを見たと話されたので、中国全般にこの方法が行きわたっているのではなからうか。山西省は降水量も少なく、毎日晴天続きで、路面が乾燥し、舗装されているので他力脱穀もできるのだろう。なお茎もつぶされて軟くなり、家畜の餌料として用いられているという。



第29図 車にて脱穀

ロ．道路の遮断機

これも豆村鎮附近でみたが、公路に遮断機



第30図 公路上の遮断機

がある。鉄道でも通っていけば合点できるが、不思議でならなかった。話を聞くとこれは山から樹木を伐採して、車（主に馬車）に積んでくるのを捕えるためだそうである。盗伐者の監視所ということである。沙河鎮から五台山に通ずる公路は、完全舗装であるが山峡や山腹をけずりとした道路である。周辺を見ても、僅かに残された雑木の緑があるものの灰白色の山肌がむき出しにされている。中国の重要な政策の一つとして、この山々を緑でおおうことと緑の保存に躍起となっている。そのため樹木の伐採は法的に禁止している。緑といってもこの附近は、ほとんどポプラである。畑には植林のためのポプラの苗木の植えつけが多い。また政府はこれを達成するため「人民は毎年一人一本の植樹」が義務づけられている。

この公路をさえぎる遮断機も、盗伐者の監視の役目を担っているという訳である。

ハ、中国のイスラム教

私はかつてイラン、パキスタン、インドネシア（ジャバ本島、スラウエジ）を旅行した経験があり、イスラム圏の人々の信仰の深さは、私のような凡人にはわからない。アラーの神は全知全能、始めもなく終もなく、その力は無辺際に及ぶ、至全至善のものとして人々の信仰は心に刻ざまれている。

大同より沙河鎮に至り、仏宮寺の釈迦堂を見学したあと街を歩いてみた。ふとレストラ

ンの看板が目につき、その上は中国語のレストランの名称、その下にポーフラかミミズののたくったような文字が書いてある。アラビア文字である。私には読めず、通訳に聞いてみると「このレストランはイスラム教信者の店で、下に書いてあるのはそのマークだ」という。私はイスラム圏は中近東、アフリカの地中海沿岸、東南アジア位のものと思っていたが、これは宗教に無学のせいでもあった。

帰国して文献をあさってみると中国ではその西域を中心として2,000万~3,000万のイスラム教徒がいると推定される。このレストランの看板の表示もイスラム教徒であることを表わしている。また料理も、イスラムは豚を食べないので、豚の料理を出さず、またこの教徒は酒を禁じられているので、酒類も提供しないという表示とも受けとれる。

北京の西苑飯店ホテルにて宿泊した翌日の朝まだき、窓外からかすかに聞えるコーランの祈りの響きでめざめ、北京にもイスラム教徒がかなりいるらしいことをさとった。すなわち朝6時の起床時の祈りであったのだろう。



第31図 イスラム教徒のレストラン（沙河鎮）

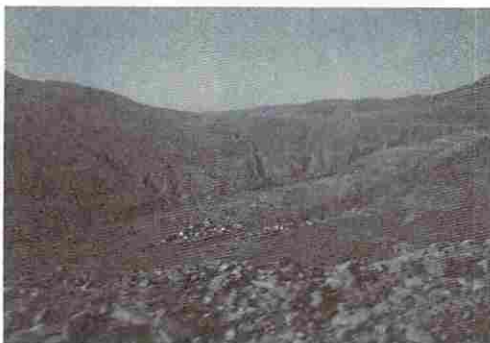
二、耕して天に登る

大同より南下して山間地帯に入る。バスの疾走する周辺の山肌は、耕作されて山頂近くまで達している。台懐鎮、3000米級の山々に懐かれた盆地であり、数多い寺院が瓦を接している。この山肌は、刈取りもすんで、茶褐色で、緑はほとんどない。段々畑が数百米上まで続いている。すなわち“耕して天に登る”の言葉が眼にうつる。

ここで聞いてみると焼畑農業で食糧が支えられているという。焼畑農業は、最も原始的な粗放農業で、原野または山林に火を放って草木を焼きはらい耕作し、施肥せず、アワ、ヒエ、トモロコシ、豆類、麦などを播種し、焼いた灰が肥料となる。数年後土地が衰えれば、さらにこれに続く草木の生え茂る所を焼きはらって新たな耕作地を作る。日本でも水田稲作の行われる前の縄文時代にはこの農法が行われていたと伝えられる。

この五台山の台懐鎮でも、頂に向かって段々畑がくっきり視野のうちに入る。この地には大小70の寺院と数百の僧、それに多数の住民の食糧を支えるため、数百米の高さまで耕作が行われている。

いまわが国では、秋の収穫のあと稻田の薬の野焼がみられるが、この大規模な焼畑農業の風物に接し、新しい知識が植えつけられた。



第32図 段々畑一山の上まで作られている
(五台山への公路の途中の村落附近)

ホ、五台山回顧

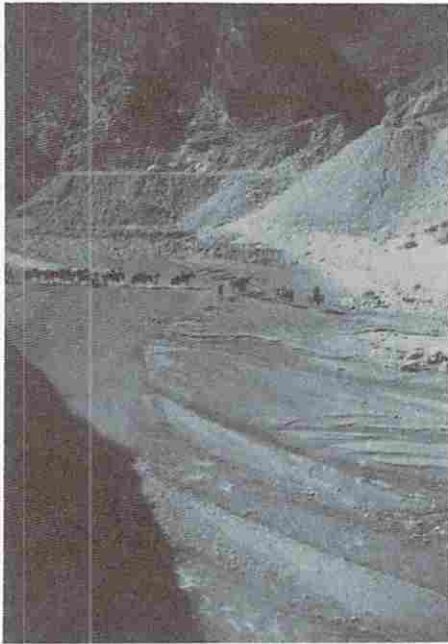
五台山は普陀山（浙江省）、峨眉山（四川省）、九華山（安徽省）とともに中国仏教の4大霊山と称せられている。紀元前6世紀釈迦により仏教が興され、西域よりシルクロードによって、さまざまな文化が中国へ入ってきた。仏教もその一つである。後漢の明帝（1世紀頃）の夢に金人（仏）が現われ、西の方から聖人がくることを告げた。帝は早速使者を西域に送ったところ、途中、白馬に仏像や聖典を乗せた二人の僧に出会う。使者は二人を都の洛陽に連れ帰り、郊外に白馬寺を建てて住まわせた。このことから約二千年前、洛陽附近に仏教がもたらされたものと思われる。さらに明帝はこの僧のすすめで五台山に太浮靈鸞寺を建てたと伝えられ、これは1900年前である。

私は昭和12年8月以来、山砲兵連隊の軍医として中国の戦野にあり、河北省を横断し太行山脈を越え、山西省太原攻略戦に参加した。その後忻県に駐留していた。昭和13年9月、昭和14年4月と2度にわたり、八路軍のゲリラ戦に悩まれ、その根拠地である五台山作戦に参加した。

五台山は五つの峰、東台（2,773m）、北台（3,058m）、中台（2,894m）、西台（2,773m）、南台（2,485m）の山容に囲まれ、この山頂は円く、840年日本の僧円仁が仏教修業のため、永い旅の末、この峠に立ち、初印象として「五頂之円高、不見樹木、状如覆盆、不覚流涙」と記している。

この五つの山に囲まれた盆地、標高2000mに台懐鎮があり、ここはその聖地で、現在50に近い寺院が藁（イラカ）を接している。

この度の旅行は大同よりのバス旅行で、舗装整備された公路を快適に飛ばせた。50年前岩石や水流に阻まれた河床や、人馬も漸く通ずる棧道、急坂、峠路を辿りつつ、台懐鎮に進入した。私どもがここに達する頃は、すでもぬけのから、一発の砲弾も発射せず



第33図 河床道を通り五台山へ
(昭和13年)

着した。とくに思い出残ることは、部落に進攻すると、連なる山々の砦(トリテ)の狼煙台(ノロシダイ)から次々に煙があがる。彼等は中国古来の連絡網、狼煙が唯一のものであり、私どもの方は無線機や通信線を使っていた。山上よりわれわれの動きを察し、狼煙を合図に退散し、食物の上の縄の如く、後方攪乱が唯一の戦法、ゲリラ戦に悩まれた。

この度訪れた寺院、金閣寺、仏光寺、龍泉寺、南山寺、竹林寺など日本にもある名称の



第36図 昭和13年9月宿営した南山寺の僧房
(当時と変っていない)



第34図 河床道を通り五台山へ(昭和13年)



第35図 極寒期(-20度)の防寒軍装(豊田)
(昭和12年12月)

寺院が次々に並らんでいる。このこともわが国への仏教伝来に密接な関係があるように思われる。

私の宿営した所は南山寺で、ここの僧房で約2週間過した。この寺院のたたずまいは、



第37図 南山寺住職の揮毫



第38図 大白塔

50年の歳月を閲した今日でも全く変わっておらず僧房での日々が蘇える。私は撒退するとき南山寺住職含全師が、記念として揮毫し贈られた「南無阿陀陀仏」の称号の軸は今でもわが家の仏壇に安置してある。今度そのコピーをもって訪れたが、同師は30年前に鬼籍に入られた由で再見できず、仏前で冥福を祈った。

五台山のシンボルは、何といても大白塔である。塔高75.3m、塔圍83.3m、1700年前、



第39図 塔院寺の入口にて

インドのアショーカ王の作った舍利塔と文珠髮塔が、このなかに安置されているという。私どもは台懷鎮を見おろす峠路で、バスのなかから先ず眼を射るものはこの大白塔、ラマ塔で、塔院寺の境内にある。

ここでもう一つの思い出がある。台懷鎮の中央を流れる清涼河、水流は清冽である。今まで濁流しか見ていなかった私どもには絶好な沐浴場となる。沐浴していた兵たちが、身体を洗っていると何か魚がいると喜び、



第40図 対日ゲリラ作戦の本拠地毛沢東駐留寺院

すくってみると小さな鮠(ゴリ)に似たもので、生魚に飢えていた将校連中にも食べさせようと持ってきた。これを鍋に入れようとするのと僧に止められた。「生きているものを殺してはならない。私これを仏前に具え、読経してからにしてくれ」と。寺院内の殺生はできないらしい。それでこの小魚を鉢に入れ、仏前で読経してから下げ渡された。私どもは久しく口にしなかった生魚、鮠らしきものの味噌汁に舌鼓をうった。

この南山寺における2週間、襲撃もなく、この地の寺院の見物に過し、忻県の宿営地に帰還した。帰れば再び食物の上の蠅の如く共産軍の根拠地となり、毛沢東の滞在していた所は、顯通寺に接した一寺院で、その掲額に大きく「毛主席路居旧留」と記されており、室内には大きな毛沢東の塑像が安置してある。

悠久の時は流れる。さらにまた私はここを訪れることはないだろう。五台山の寺院は静謐のうちに信仰の道場として、いく久しく人の心の支えとしての聖地のただずまいを保つよう祈りながら2年有余過した忻県、太原へとバスの旅を続けた。



第41図 寺院内毛沢東の塑像

へ。煙草の吸いがら

明の十三陵見学の途中、20名位の青年が箒やシャベルを肩にして行進してくる。どうしてもふに落ちない。聞いてみると道路の清掃隊である。特別命令されたり、頼まれたわけでもないが、自発的、いわばボランティア活



第42図 明の十三陵附近でみた清掃隊

動である。

北京はもとより方々歩いたが、どこも清潔で塵一つ落ちていない。昨年遼寧省を旅行したとき、工場などに「不准随地吐痰，不准随地便溺，不准乱泼脏水，不准乱扔脏物」というポスターがはられている。つまり「どこでも痰をはいてはならない。どこでも大小便をしてはならない。どこでも汚い水をまきちらしてはいけない。どこでも汚いものをすててはならない」の注意警告である。

とくに路上をくわえ煙草で歩くものがない。あれば日本人である。私はヘビー・スモーカーの部類に属するが、街路上のくわえ煙草は絶対にやらない。その動機は10余年前、シンガポールのホテルで、ロビーからくわえ煙草のまま街へ出ようとしたとき、そのホテルのマネジャーから吸がらや痰を路上にすてたりはいたりすると5万円の罰金をとられると注意されてからである。

たまたま第11次訪中団の記録「蘭湖」を送られ通読していたところ、金田副団長の記事「観光地、広場、交叉点等で女性監視人、交通整理人を見かける。天安門広場で煙草のすいがらを捨てると、どこからか若い女性がやってきて、反則切符を切る。私たちの団員の一人も五角（日貨で35円）の反則金をとられた」と記載してある。

私どもの一行でこのことを知っていた人は幾人だろうか。この記事を読んで、私たちは前車の轍（ワダチ）を踏む愚はなかったよう



第43図 公衆便所、大小便ともここで並列

で、反則金を払ったものはなかった。

このことは帰国して上記の記録で知ったが、シンガポール、ヘルシンキ、ハワイ並と今更ながら知りえた。

しかしこの街の清潔さに比べて、トイレの不潔さに往生した。ことに公衆便所は写真の如きもので、昨年高岡市青年の翼で同行した女性は、この開放性の汚ないトイレに辟易して用を果さなかったものもあったとか。

ト. 庶民住宅

私は、この度の旅行で、中国の人々の生活実態を見たかった。しかしスケジュールは数多くの文化的遺産の見学に終始し、その余裕は全くなかったといってよい。実は昨年錦州市を訪問したとき、農村視察がスケジュールに組みこまれ、農業と農民の生活の実態が把握でき、中国の現状の一端を知りえた。

今回大同から五台山に向う途中、砂河鎮での観音堂の見学も、外から垣間見程度にして、庶民の家へ入りこんだ。迷路のような細い小路で出会った主婦らしいのに家を見せてくれたと頼んだが逡巡していたようだったが、その家の主が快よく応じてくれた。この家はレンガと泥土で塗り固められているような相当の年数を経たものと思われる。その屋根には高粱、粟、稗の穀がうづ高く積み重ねられ、越冬用の燃料に用いるものだろう。家に入るとひと間、広さは8坪位。その中央を仕切って炕(オンドル)が1m位の高さで作ってある。



第44図 農村庶民住宅
(ワラがうづ高く積まれている)

上には毛布を敷き、片隅に蒲団が巻きつけてある。寝所である。この炕(オンドル)はレンガと土で作ってある。その部屋の半分は土間で、ここで炊事、食事、雑用を行う。鍋はひとつ隅のコンロの上においてあり、これ一つで総ての食事をととのえる。その隣に机がしつらえてあり、その上にはお湯を入れるポット2個、鏡や化粧具、ラジオが置いてある。私が50年前、仮寝の夢を結んだ頃とほとんど変わっていない。

都市では労働者アパートが続々として建設されているが、地方農村まで及んでいない。聞く所によるとこのアパートも1DKで、広さもこれと同様らしい。ただ新しいだけで調度品もこれと変りばえもしないだろう。土地建物はすべて国有、アパートは月200円の家賃を払っていると聞かされていたが、ここでは聞きもらして判らない。

数年前、某女子大の教授の中国視察帰来談を聞いたが、中国では家族は何人あっても狭い一間で鍋一つで食事を作っていると述べていた。この度の旅行でたった一軒、農村の庶民の家へ入りこんだが、全くそれが事実のように私の眼に写った。

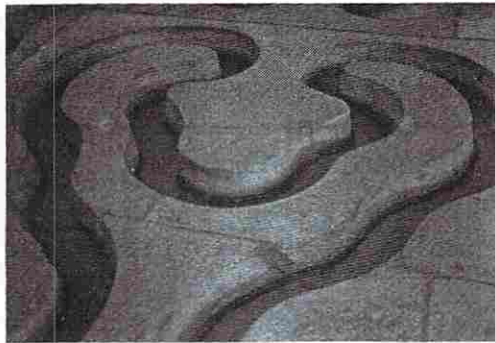


第45図 一間の部屋の半分

11. 曲水の宴

緑に映える樹林にかこまれ、蜜柑色の萋がならぶ紫禁城、さらに宮殿内は精緻、絢爛、極彩色の調度の数々はぜいをつくし、皇帝の権威の象徴ともいえる。私はこれに見とれな

がら歩を進めると、小さな内庭にでる。その庭は100坪足らずのもので、この地上にあたかも彫刻されたように幅30cm位の溝が蛇行屈曲し、しかも大体対称的に流れている。構造は青みがかかった石で、精巧に削りとられている。みなれない形で、ガイドに問うと曲水という。



第46図 曲水の流れ

私の頭のなかに曲水の宴という言葉が浮かび上ってくる。帰国してから文献を渉猟してみると、中国では古い時代に3月上巳に郊外の水辺に出て、招魂、祓除（フツジョ、おはらい）を行ない、酒をくみかわす風習があった。それが屈曲した水流に盃を浮かべて酒をのむようになる。これは3月3日と日を決めた、この嚆矢は、晋の永和9年3月3日、王羲之が文人を会稽山の蘭亭に集め、この遊びをした。それには「有清流激湍，映帶左右，引以流觴曲水」と述べている。

この風習が日本に伝わり、奈良、平安時代に朝廷や公家などに3月上巳あるいは3月3日に流水池辺のみぎわに坐り、上流から盃を流して、それを下流にてとりこれを呑みほし、詩を作る宴遊となっている。

私は、特にこれに心をひかれたのは、金沢の兼六園にもそれがみられたからである。廣大、幽すい、人力、蒼古、水泉、眺望の六を兼ねているが、ここを逍遙すると、小立野台より辰巳用水が山崎山の榎をめぐり、水の流水が屈曲し、春には桜の花びらが浮び、また

あやめの紫が水中に研を競い、霞ヶ池に注ぐ。

私は学生時代から、この流れで前田の殿様が、曲水の宴を催したという故事をよく聞いた。故実にうとい私でも百万石の財力で、風雅な行事に贅の限りを尽してた藩政時代、それになじんだ城下町の雰囲気は今でもただよっている。また時折、城内の部屋からこのあたりをそぞろ歩きし、この曲水を眺めたことが、そのルーツ、北京の故宮の内庭で、屈曲した石造りの溝、水は流れていなかったが、眼にふれたとたん短絡的といえるかも知れないが、兼六園のいつも眼についた流れが結びついた。

む す び

夏侯湛詩「朔風動秋草 辺馬有帰心」、私の今回の旅行、感慨はこれにつきる。50年の有為転変、地球上のあらゆる事象は揺れ動きつつあるなか山西省の山野は、かつての面影を残し、一頭の辺馬にも等しき私は、懐旧の情忍びがたく、足を止めること再三ではなかった。

数十ヶ所の寺院の巡拝も三千年の中国の栄華と盛衰の面影を偲ぶに止まり、仏教東漸の歴史の一コマとして、私の心のうちに刻まれるにすぎなかった。

同行の各位も、それぞれの思いを秘めて帰国されたものと思うが、私自身絢爛たる寺院よりも、現在の中国の人々の心を掴みたかった。しかしスケジュールが密に組まれ、それに自由時間もなく、心に懐いていた“帰心”が満されなかった。

それで瞥見した事象を、私の頭のなかで画きつつ記述してみた。あるいは当をえていない点多々あるかも知れないが、回顧の一断片として思い出していただければ幸である。

終りに同行中の最年長者である私に対し、暖かいご配慮とご援助をいただき、深甚なる感謝の意を表する。